



人々の健康と環境の保全のためにベストをつくす政策を求める

前号につづき「さよなら原発三・八関西アクシオン」本集会の発言です。

■福島からの避難者

うのさえこさん

私たちが今、福島を中心として子どもたちにとれだけの重荷を背負わせようとしているのか、ほんとうに胸が痛いです。あと三日で三月十一日がやってきます。震災と津波によってほんとうに多くの命が失われました。

そして東京電力原子力発電所では、過酷事故が起きました。経験したことのない大きな地震の中で、間に合わなかったという怖ろしい予感が入み上げてきたときのこととを私は何度でも思い出します。午後四時前、福島原発全電源喪失、電源車が向かっているという連絡を友人から受けました。そしてその日の夜中に福島第一原発の所長であった吉田所長からのFAX文書を目にしたとき、電源車が間に合っていないという願いがかなわなかったことを知りました。

私と友人は小さな子どもたちを連れて、西へと避難を始めました。あれから四年、この未曾有の原子力災害は、メルトダウンした核燃料がどこにどのように存在しているのかすら分からないまま、どのように収束させていくのか、どのように放射線物質の環境中への放出をとめられるのか、何も分からないまま今も続いています。

これから何年、何十年、百年と続いていくと言われていきます。毎日七千人もの人々が高度の被曝に曝さらされながら作業にあたりています。何重もの下請け構造の中で低賃金で安全対策も保障されないまま、人々の命と健康が使い捨てにされています。被曝限度を超えてしまうため被曝限度の基準を緩めようと、今、議論がされています。

被曝の不安なく故郷で暮らしたいという願いはかなえられないまま避難を強いられる理不尽と帰還を強いられる理不尽、そして避難させない理不尽は続き、被災者の人権は蹂躪しごされています。

原発事故の渦中に四年、障がいや病をもつ人々が

命を奪われていきました。さまざま健康上の異変も起きています。百人を超える子どもたちが甲状腺がんと診断され、その多くがすでに手術を受けました。先の希望が見えず鬱うつになったり、自ら死を選ぶ人も後を絶ちません。

汚染を被った地域の私たちが望むものは、「三・一一」前の、もとの故郷、もとの暮らしです。しかし、それは極めて困難な現実の中で、私たちが身を切るような悲しみとともに求めているのは、人々の健康と環境の保全のためにベストをつくそうという姿勢のもとでの政策

であり、いまだ進行中である福島第一原発事故の被害の最小化であり、大きな余震等による次の危機への最大限の準備であり、このような悲惨な核災害を別の場所で再び起こさないための全力の取り組みです。

しかし、この事故の一次的責任を負うべき東京電力と国は、被害を最小にくい止めようとはせず、新たに放射能安全神話を振りまき、情報の公開、避難の誘導、ヨウ素剤配布、被曝防護の指導、住民の健康診断、保養支援、避難支援、あらゆる可能な必要不可欠な政策をサボターシユしています。

そして、そのうえで地殻の大変動期に入っている日本列島上の他の原発の再稼働、核燃サイクル計画など、日本が核兵器保有能力を持つことに固執しており、さらには同様の地震国であるトルコなど、海外への原発輸出へも乗りだしています。

これは、福島原子力災害被災者を踏みにじるものであり、また、世界の人々の命をも軽んじる誤った政策です。今日お集まりのみなさん、未来の世代にこれ以上の重荷と苦しみを負わさないため、渾身の力をこめて日本の核政策をくい止めていきましょう。そして近い将

来に必ず来る次の巨大地震に備え、次の核災害を起さないための対策をただちに始めるように求めたいです。

もうすぐ憲法改悪の法案も出されることでしょう。このような軍国化の強行と原発推進、被曝受任の強要は、三位一体のものと感じます。このすべてに反対いたします。やるべきことはたくさんありますが、台湾の若い人たちの希望ある動きにも力を得ながら、それぞれの場所ですることをやり続けていきましょう。

アート・アド分会 N